

研究発表会

当館では、準備室時代より毎月1回のペースで学芸課職員による研究会を開催している。研究会は、日頃の研究課題についての発表のほか、計画中あるいは準備中の展覧会についての報告や検討の場としても機能し、研究成果を共有してさらなる議論を深める役割を果たしている。また、日常業務や国内外の出張、開催された展覧会の反省などの話題も盛り込まれるようになっていく。

本年の発表題目および要旨は以下のとおり。館長および学芸課全職員の出席を原則とし、発表者が司会を指名した上、40分程度の発表後に質疑応答する形式を取っている。

4月

黒川翠山の富士山写真 ― 写真の虚構性をめぐって― 発表者：堀切正人

静岡県立美術館には、黒川翠山が撮影した富士山の写真が多数、収蔵されている。黒川翠山は、明治後期から昭和前期にかけて活躍した、いわゆる芸術写真家の草分けの一人である。撮影年、プリントした年などはほとんど不明であるが、プリント裏面やガラス乾板への書き込み、または雑誌『太陽』掲載の写真との照合によって、数点について、年代の特定を行った。翠山の富士山写真には、前景に人物を配することが多いが、その人物のポーズを違えた同じ構図の写真が多く存在する。つまり、それらの人物は演出されたものであるわけだが、当時の翠山写真への批評は、こうした虚構を踏まえた上で評価がなされていた。翠山の富士山写真における演出とそれへの批評をもとに、写真史における翠山の位置づけと、写真芸術がもつ記録性と虚構性について、考察を加えた。

5月

清水登之《セーヌ河畔》について

発表者：村上 敬

平成14年度に収集された清水登之の作品《セーヌ河畔》についての研究発表。

発表者はまず、大川美術館所蔵の「清水登之日記」他当該作についての資料の検討をとおして、当該作をとりまく制作や流通の状況を検討した。続いて、当該作のヴァリエーションである栃木県立美術館所蔵の同名作品が出品されたと考えられてきた独立美術協会展第一回展について考察を加えた。様式や日記の記述等を総合的に判断した結果、発表者は、静岡県立美術館、栃木県立美術館の所蔵するいずれの《セーヌ河畔》もこ

の展覧会には出品されていないという結論に達した。

6月

小林清親「東京名所図」をめぐって

発表者：飯田 真

小林清親が明治初年に発表した代表作「東京名所図」について、風景への視覚の新しさを、(1)近代風景への目＝近代建築と江戸の情緒の融合(2)空への意識＝光の微妙な表現から生まれる空への意識(3)闇への意識＝伝統では描かれなかった闇の表現(4)画家の目＝画家の視線が感じられる、画家だけの心に焼きついた風景の描写、という4つの視点から各作品に即して考察し、「東京名所図」の特質を整理するとともに、江戸と明治を結ぶ過渡期の様相を呈する本作品の位置づけを再検討した。当館で開催された「もうひとつの明治美術展」「<彫刻>と<工芸>展」と関連させ、今広く行なわれている、明治美術の再検証の意味からの問題提起としての発表であった。

7月 休会

8月

対称から非対称へ

視覚的バランス感覚の育成に関する試み

発表者：福元清志

高校生に絵を描かせると美術に苦手意識を持つ生徒ほど正対称の画面構成を好んで選択する傾向が感じられる。彼らは、画面のバランスを考えるにあたって、対角線とその交点を通る分割線が作る1:1の比例が持つ安定した関係に頼らないと不安になるのではないのか。この推測を出発点にして、演習を中心とした指導過程により、画面の三分割や黄金比に代表されるような比例を用いた制作を教えると、生徒たちが描く絵はどう変化するのか。非対称な関係が持つバランスを意識すると、作品の鑑賞においても影響が出るものなのか。発表者が高等学校で取り組んだ、視覚的なバランス感覚を育成するための試みを紹介すると共に、その成果と問題点について考察した。

9月

現代美術の定立

発表者：川谷承子

本年の研究発表では、現在われわれが自明のものとして用いている、いわゆる「現代美術」という語についての考察を行った。

静岡県立美術館では、日本画班、西洋班、ロダン班、日本洋画班、現代班の5つに美術のジャンルを分けて作品収集から展覧会に至るまでの活動を行っている。ロダン班は、ロダンと日本近代以降の彫刻を、また日本画班は室町時代以降の日本画を扱い、西洋班は17世紀から20世紀初頭の西洋絵画を、日本洋画班は、明治から戦前までの日本洋画を扱っている。一方、現代班は、第二次世界大戦後の日本と西洋の作品を扱っている。我々が「現代」という語を用いるとき、そこに明確な様式なり思想なりの定義があるわけではなく、あくまで便宜的に他のジャンルと識別するために時代区分として用いられているにすぎない。この「現代」という語を単なる時代区分としてではなく、そもそも現代美術を「現代」たらしめる特徴にもとづいて定義することはできるだろうか。また定義するとしてどのようなアプローチの方法が可能だろうか？本発表ではそのような素朴な疑問が発端となっている。今回は、斎藤義重という戦後日本を代表する作家をサンプルとして取り上げ、斎藤の作品変遷のみならず、1950年代の展覧会、画廊制度、美術批評、美術論争、など、今となっては歴史の中に埋もれた言葉や社会制度の変化を検証することによって、この時代に起こったシステムのダイナミックな変化を浮き上がらせることを試みた。

10月

油彩スケッチ考——新しい様式の生成をめぐる

発表者：小針由紀隆

発表者が注目したのは、2004年にサラ・フォーンズが油彩スケッチに対して提唱した「国際戸外様式 International plein air style」という呼び名であった。この発表では最初に、出品作に沿いながら油彩スケッチの諸特徴(断片性、偶発性、瞬時性、直接性、匿名性、細部描写など)を明らかにした後、いくつかの先行研究を紹介。18世紀後半から19世紀初めにかけて人間の知覚経験に生じたモチーフの組替えに関するピーター・ガラシの意見や、再現的描写とメンタル・セットとの関係についてのゴンブリッチの説明などを参照しつつ、油彩スケッチが18世紀後半からの視(知)覚の変化をどのように反映していたのかを考えてみた。

11月

ロダンのアッサンブラージュ考

—「ケンタウロス」の変遷より

発表者：南 美幸

オーギュスト・ロダンのお気に入りだった「ケンタ

ウロス」モチーフに関して、その用い方の変遷を年代順に辿りながら、造形上のみならず、主題の面からの考察を試みた発表。これらの彫刻作品は、作者自身の証言やドキュメントなどを含めた一次資料が極めて少なく、従来は造形上の観点からの解釈、すなわちアッサンブラージュやトルソという側面が強調されてきた。しかし、「ケンタウロス」作品に見られる、①各部のサイズのアンバランス、②性格の二重性(人/馬、魂/肉体、など)、③男性形から女性形への変換、などの特徴は造形上の実験にとどまらない、ロダンの創案によるデザイン上の大きな変化である。以上の点から、作例が少ないのが難点ではあるが、主題あるいは内容上の解釈可能性という両義性を、「ケンタウロス」のアッサンブラージュに関して検討した。

12月

鹿子木孟郎《紀州勝浦》における

自然主義的傾向について

発表者：泰井 良

当館所蔵鹿子木孟郎《紀州勝浦》(明治43年・1910 59.0×74.8cm キャンヴァス・油彩)には、文展に出品された類作(ヴァリエント)が存在した(現在は所在不詳)。本作は、文展を意識したため、寸法が約150×180cmと大画面で、当時、大正天皇の侍医を務めた入澤達吉氏が所蔵していた。本発表では、当館所蔵作と文展出品作を比較することで、鹿子木の油彩による風景画制作およびフランスのサロンを模して開設された文展に対する彼の考え方などに言及した。まず、当館所蔵作は、自然を眼前にした際の率直な感興が画面に現れており、また、紫や緑といった鮮やかな色彩を効果的に用いている。いわば「オイル・デッサン」的な要素を多分に残しており、そのために画面からは造り込まれたという感じはしない。一方、文展出品作は、岩の部分などに太い描線が見られ、細部の木々を省略するなど、意図的な画面作りが見られる。このことから推測して、鹿子木は、当館所蔵作をはじめとする多くのオイル・デッサンを制作した後、文展出品作に結実させたと考えられる。

これは、当時フランスの新古典主義やアカデミズムの画家たちの間ではオーソドックスな手法であり、印象派の制作手法とは対照的である。鹿子木は、アカデミズムの手法や理念を日本にも取り入れようとしていたのであり、風景画制作についても、そのことが言える。

しかしながら、日本の風土にアカデミズムが馴染む

か否かについては、むしろ不適なものであり、鹿子木が描いた風景画の中で優れた作品は、官設展に出品された仕上げられた作品よりも、「デッサン」の要素を残した作品に多いことは、皮肉なことである。

1月

ピラネージのドムス・アウレアについて

発表者：新田建史

イタリア18世紀の版画家・建築家、ジョヴァンニ・バッティスタ・ピラネージ(1720-1778)は、ローマの景観図(Veduta)を描くことで広く世に知られた人物である。静岡県立美術館には、その『ローマの景観』連作の内、初版33点が所蔵されている。その中の5点は、第2版ないし第3版で、画面に添えられた詞書が変更されている。本発表ではそれらの中から《コンスタンティヌスのバシリカ(当館所蔵番号P-179-1082(24))》及び《ウェヌスとローマの神殿(当館所蔵番号P-179-1082(27))》を取り上げ、その変更の理由について考察した。

これらの詞書は変更後、描かれている遺構がドムス・アウレアという建築物の一部であるという説を強調するものになっていく。古代ローマの皇帝ネロの建てさせたこの宮殿の全貌は、今日でも明らかではなく、これはピラネージの時代にも論議的であったように思われる。本発表ではピラネージが、コルトーナのアカデミア・エトルスカの主席研究者であったリドルフィーノ・ヴェヌーティ(1703-1765)との見解の相違を意識したことから、自説を強調するために詞書を変更した、という仮説を提示した。

2月

描かれた富士——平安時代から桃山時代まで

発表者：山下善也

河野元昭監修『美JAPAN 富士山』四季出版(2005年3月)に収録された拙稿「描かれた富士——平安から桃山時代まで」の内容を紹介。時代を限定し、江戸時代より前、桃山時代までを扱い、富士山の絵画について、どのようなアプローチが可能かについて、話題提供した。

富士山の絵画は、富士山のある静岡県、その県立美術館である当館にとって、当然また必然として、特に強い関心事である。その考察、研究を、さまざまな視点・方法から行なう使命を当館員は背負っているし、当館において、富士山と美術に関わる研究は、繰り返しながら必要があろう。

この発表では、最も古い平安時代から江戸時代の前

までの富士山の絵画にどのようなものがあるか、多くの具体例を紹介して、その変遷をたどり、今後、このテーマに関する研究を行なっていくうえでの基礎的な情報提供とした。この考察は、日本の風景表現の問題とも関わるものであり、さらに問題を発展させていく可能性もはらんでいる。

3月

松岡映丘、やまと絵近代化の試み

—文学主題との関わりを中心に

発表者：森 充代

次年度開催予定の「物語のある絵画—日本画と古典文学の出会い」展への準備として、文学主題に積極的に取り組んだ日本画家・松岡映丘について論じた。明治初期、やまと絵は伝統墨守の旧時代の画風であるとして時に攻撃の対象となったが、映丘はその中でやまと絵の近代化を図り、新時代にふさわしい絵画として復活させようと試みた。華やかな色彩による装飾的な画面作りをさらに推し進めること、古絵巻など伝統的なやまと絵に学びながらそこに写実味を加えていくこと、などがその手法となった。さらに主題の面では、やまと絵による風景表現に新機軸を打ち出すが、伝統的な名所ではなく匿名あるいは無名の風景を取り上げる点に、文学性を排除していこうとする近代の行き方との同調を見せる。その一方で文学主題との豊かな関係は、絵巻の研究や制作へと応用されており、その意味で、夏目漱石の同時代小説を絵巻化した《草枕絵巻》(奈良国立博物館蔵)の試みは大変注目される。